第５章　調査結果のまとめ

Ⅰ．未就学児家庭における子育て支援ニーズ

１．基本事項の整理

（１）子育て意識について

本調査によれば、子どもをもつ以前に、父親・母親の３割程度は、子どもをもつことに不安を感じていた。また１割強は、子育ては大変なことなので関わりたくないと感じていた。子育てをしている現在では、「子育ては楽しい」と回答する父親が 77.4%、母親が 67.8%にも上っていることから、子どもをもつ前の不安の一部は、実際の子育てを経験することで解消されることが、みてとれる。

一世帯あたりの子どもの平均人数は 1.9 人であるが、父親・母親の各 7 割程度が、「子どもはもういらない」と回答している。子どもが１人の場合でも、子どもをもうける希望のある母親は 38.3%、父親は 40.2%と４割前後にとどまっている。ここには、子育てに伴う不安も関与していると考えられる。子育てにおける最大の悩みは、父親・母親とも「子どもとの時間が十分にとれない」ことと「仕事や自分のことが十分にできない」ことである。さらに、現在子育ての負担を多く負っていると考えられる母親は、「子どもとの接し方に自信がない」、「子育てについて周囲の目が気になる」といった、子育てをめぐる社会関係の悩みも多く抱えている。ただし、子育てのメリットについては、父親よりも母親の方が、メリットを多く感じている。

（２）子育てと働き方について

父親の 17.3%は、「家事・育児を優先した生活」を希望している。しかし、そのような生活を実現できた、と感じている父親は 7.7%にとどまっている。出産を機に「労働時間の短縮」、「勤務時間のシフト」、「出勤日の変更」を検討した父親もいたが、多くは希望を実現できずにいる。本人の希望とは別の事情により、「仕事を優先した生活」になっている。

一方、母親の 14.1%は、「自分の生活や仕事を重視した生活」を希望しているものの、そのような生活を実現している人のは 6.3%にとどまっている。就業中に「出産にともなう退職」を希望したのは 26.5%だったが、結果的には 40.3%が退職している。本調査の対象となった母親の多くは、主に結婚・出産を機とした退職経験をもっているが、退職を後悔している母親が 2 割にも上っている。

「育児休業が取得できなかった理由」では、「職場の同僚への迷惑」、「職場の雰囲気で取得しにくい」が上位に入っており、周囲の目を意識している状況がみてとれる。

育児休業を取得した母親の感想でも、「育児に専念できるのは良い」、「地域に知り合いができてうれしい」という肯定的な回答が多い一方、「職場を長期間離れることが不安」、「地域に知り合いができず孤独」という不安があがっている。これらの回答は「復帰に合わせて保育所に預けられない」、「保育所入所のために休業を短縮した」という制度上の課題よりも多くなっている。子育てと働き方における課題は、制度の不整備だけではなく、文化的・社会的要因による意識面の問題が大きいことがわかる。

（３）父親の関わり方に対する評価と母親の育児不安について

子育てへ関わり方が十分かどうかについて、自己評価と配偶者間の相互評価をしてもらったところ、父母どちらについても、自己評価よりも配偶者・パートナーからの評価の方が高くなっている。関わりが十分でない理由としても、父親は「仕事が忙しい」ことが多くを占め、ある程度はやむを得ないと考えられているようである。しかし、具体的に父親の不満な点についての個別評価を聞くと、ただ仕事で忙しいだけでなく「父親は子どもや家庭への関心が弱い」と考えている母親も多いことがわかる。そのような環境で、母親は「子どもとどう接したら良いかわからない」、「子育てに関する知識が乏しい」などの不安を多く抱えている。

子育てに関する母親の主な相談相手は、「配偶者」、「自分の母」、「近所の知人」、「自分や配偶者の友人」といった身近な人間である。「医療関係者」、「公的機関」、「ボランティア」といった専門家によるアドバイスだけでなく、これら同じ立場で、悩みを分かち合える人を求める気持ちが強い。この意味でも、母親の不安や悩みの解消のため、また満足度の向上のために、最も身近な存在である父親の与える影響は大きいと考えられる。

２．テーマ別分析の整理

（１）母親の負担感・不安感について

母親の子育ての楽しさ、不安感、満足度について要因を分析した。

本調査では、父親の「家事・子育ての優先度の希望」、つまり参加意識の高さが、母親の子育ての不安感の解消や満足度と、子育ての楽しさの向上に大きく影響していることが示唆された。また、「父親が休日に子どもと過ごす時間」が長いほど、母親の悩みが軽減され、生活の満足度も向上する傾向にあることがわかった

「母親と地域社会の関係」の分析からは、子育てを通じた、より親密な付き合いを持つことが、母親が子育てを楽しむこと、子育ての悩み・不安の改善、生活の満足度の向上によい影響を与えることがわかった。

その他、「三世代同居等」の母親は、子育てを楽しんでいる割合が高いこと、結婚年

齢が高い母親は結婚前の不安を持つ人が多く、子育て中も自分の時間がとれないことに対して悩んでいる割合が高いことなどがわかった。

（２）父親の子育て意識と行動について

「家事・子育ての優先度の希望」から、父親を「仕事・自分重視」、「両立」、「家事・育児重視」に分類し、それぞれの意識と実態を分析した。

「家事･育児重視」の父親は、他のグループより長い時間を子どもと過ごし、子育ての楽しさ・メリットも他の父親より強く感じているという傾向が示された。また母親からも、育児参加を高く評価されている。

しかし「働き方の変化」の希望と現実をみると、希望の段階では「労働時間の短縮」や「勤務時間のシフト」などを希望しているにもかかわらず、現実としては他の父親と、大きな差はみられない。育児休業の取得に対しても意識面では積極的だが、取得状況に違いは現れていない。

その結果、「家事・子育て重視」の父親ほど、「子どもとの時間がとれない」、「仕事や自分のことが十分できない」という悩みを感じている割合が高い。

（３）世帯における意識・期待・行動のギャップの分析

「父親は子育てに十分関わっているか」という設問に対する父親の自己評価と、母親による評価から、どちらからも評価が高いタイプ（＋＋型）、父親の自己評価は低いが母親は高く評価しているタイプ（－＋型）、父親の自己評価は高いが母親の評価は低いタイプ（＋－型）、どちらからの評価も低いタイプ（－－型）に分類した。

母親が「子育てを楽しいと感じているか」ということへの影響をみると、父親が＋＋型、－＋型の世帯では、母親は子育てを「楽しい」と感じている割合が高いことがわかった。母親の「父親の評価できる点」、「父親の不満な点」という設問から、母親の父親に対する評価をみても、＋＋型、－＋型の父親は、評価が高くなっている。

実際の父親の行動として、「子どもと過ごす時間」をみると、－＋型の父親は＋＋型の父親に次いで、子どもと過ごす時間が長いことがわかる。また、父親の「家事・子育ての優先度の希望」との関係をみると、－＋型は＋＋型よりも子育てを重視する割合が高いことがわかった。母親の評価も高く、実際に子どもとも長い時間を過ごしている－＋型の父親の自己評価が低い背景として、これらの父親が、子育てに参加したいという意識をより高くもっていることがうかがえる。

（４）子育て支援サービスのニーズについて

①母親のサービスニーズ

共働き世帯では、「長時間就労対応」等仕事との両立に関する支援が、専業主婦等では「親のリフレッシュ」に対する支援ニーズが高かった。

また、保育サービスに対するニーズとしては、母親の年齢が上がるとともに、「不定期就労への対応」ニーズが高くなり、逆に「幼稚園と類似した教育プログラムのニーズが低くなる。また、同じく保育サービスニーズについて、子どもの人数が多くなるほど、「発育に対応したプログラム」、「栄養・健康管理」、「親の悩み相談」のニーズは減少するが、「家庭のようにくつろげる環境」に対するニーズは高くなる。

②父親のサービスニーズ

父親のサービスニーズについて、「家事・子育ての優先度の希望」による分析を行ったところ、子育てを重視している人ほど、サービスニーズが高まる傾向が、多くの子育て支援サービスにおいてみられた。「子どもの人数」は、父親のニーズにも影響を与えていると考えられる。基本的には、子どもの人数が多いほど、ニーズは低下する傾向をみせるが、「子どもの病気時の対応」、「親の精神的なサポート」、「地域ネットワークづくり支援」、「親のリフレッシュ」、「父親の育児参加啓発」については、子どもの人数が多いほど高くなる傾向にある。

また、「両立」派の父親からは、「総合的な情報提供」、「子どもを遊ばせる場所・機会の提供」に対するﾆｰｽﾞが高かった。

Ⅱ．中高生の生活意識と将来の仕事・結婚・子育て観

１．学校や地域での活動、小さな子どもと関わる機会の状況

中高生の約７割は学校や地域で何らかの活動に参加しており、そのほとんどが学校の部活動・クラブ活動であった。学校や地域の活動への参加には、学校生活や友達関係の満足度が影響しており、不満に感じている人は、何も参加していない割合が高くなっていた。何も参加していない人は、勉強やアルバイトといった他にすることがある人と、テレビを見たり、繁華街等に遊びに行くなどして時間を過ごしている人に分かれていることがうかがえた。特に後者の、何となく時間を過ごしている層に対しては、学校や友達に対する意識をよい方向へ変えることができれば、学校や地域での活動への参加も促進されるのではないかと思われる。

小さな子どもと関わる機会については、関わる機会のある人は３割程度と少なく、関わる機会のある人の中では、三世代世帯や祖父母や親戚が近居している人で、親戚の小さな子どもと関わる機会のある人が多くなっていた。また、学校や地域で活動している人も、小さな子どもと関わる機会のある人が多くなっていた。核家族化が進んでいる一方で、祖父母と近居する人が増えていることから、今後、親戚の小さな子どもと関わる機会を持つ人が増えていくものと思われるが、全体的には、その数は少ないと思われることから、学校や地域で多世代の子どもが関わることのできる機会が増えていくことが期待される。

２．中高生の生活意識

中高生は、おおむね、「父親」、「母親」、「学校生活」、「友達関係」に対して、満足している状況にある。しかし、これらの満足度の中でも、特に「父親」および「母親」に対する満足度については、家族形態や両親との会話の状況、家庭の雰囲気により、大きく影響を受けることが今回の調査で明らかとなった。また、「学校生活」や「友人関係」に対する満足度は、現在の友達との付き合い方が大きく影響していることがわかった。

日常生活の満足度を高めるためには、親と子どもとの話をする時間をとることや、「夫婦仲がよい」、「家庭が和やか」と子どもが感じられるような、円満な家庭環境を作ることが重要である。

また、希薄になりがちな友達との付き合いではあるが、一方で、もっと親密な友達関係を築きたいといった希望も強いことから、まずは家庭での親子、家族との信頼関係が強くなることで、安心して社会との関わりが持て、本気で友達とけんかができたり、悩み事が相談できるような親密な付き合いができるようになると考えられる。

３．将来の仕事・結婚・子育て観

中高生は、全般には、仕事・結婚・子育て観に対して、肯定的な意見をもっている人が多くなっている。また、仕事・結婚観・子育て観はそれぞれ独立しているというより、相互に関係していることが今回の調査で明らかとなった。具体的には、結婚のイメージは「子どもが持てること」という回答が多いことや、子どもが欲しい人では「結婚したい」人が多いこと、仕事に前向きなイメージをもっている人は、結婚や子どもをもつことにも積極的であることなどから読みとれる。

こうしたことから、仕事・結婚・子育て観による中高生のグループ分けが可能であり、クラスター分析により分類した５つのグループの特徴みると、以下のとおりとなる。

（１）全般的に前向きグループ

このグループが５つのグループの中では最も人数が多く、特に女子高校生が多いのが特徴である。日常生活においては、友達との関係や学校生活が関心の主を占めている。また、友達づきあいも比較的親密で、自分の悩みも相談できる関係を築いている。

仕事・結婚・子育てについては、グループ名のとおり、肯定的な意識をもっている。

両親に対しても好意的な評価をしており、満足度も高い。また、家庭の雰囲気もよい状況にあり、仕事や結婚や子育てに対して、最も期待できるグループである。

（２）全てに対してほどほどグループ

このグループは前向きグループの次に人数が多く、女子高校生が多いのが特徴である。日常生活においては、「友達とのおしゃべりに時間をかけたい」、「学校の友達に悩みを相談している」人が多いものの、「いつも友達といなくても寂しくない」、「新しい友達を作ることができない」、「悩みを相談している人はいない」といった人も多い。友達との関係は、表面的には良いようにみえても、内面的には希薄さが感じられる。

仕事・結婚・子育てについては、グループ名のとおり、肯定的な意識とネガティブな意識の両面を持ち合わせている。

両親に対しては、特に父親の自分に対する理解度の評価が低く、母親に対しては、仕事や家事に対するやりがいについての評価が低くなっており、夫婦仲も良くないと評価している。このようなことから、仕事・結婚・子育てに関して理想はあるものの、実際の両親の姿や、理想と現実とのギャップなどからネガティブな意識も持ち合わせているのではないかと推測される。また、父親に対する満足度が低くなっている。

今後このグループの中から、肯定的な意識を強めて、就労や結婚、子育てへと実際に

行動を起こす人と、あるいはネガティブな方の意識が強まり、実際の行動を起こさずに時を過ごしていく人へとわかれていくことが予想されるが、どちらに多くが流れるかは、今後の社会環境や子育て支援策が影響するであろう。

（３）結婚・子育てには前向きだが、仕事は後ろ向きグループ

このグループは女子中学生が多いのが特徴である。日常生活においては、友達との関係に関心が高いものの、「パソコンやゲームに時間をかけたい」、「無力感・やる気がでないことに悩んでいる」、「相談している人はいない」といった人も多く、内にこもっている傾向もうかがえる。

仕事に対するイメージをみると、「仕事は大変そう」、「自由な時間がなくなる」と感じている人が多く、仕事についての希望も、「仕事はほどほどにしたい」と考えている人が多い。

子育てに対してはとても積極的、結婚に対しても不安材料はあるがやや前向きに考えているものの、仕事に対しては後ろ向きな人が多いグループである。

両親に対しては、自分に対する理解度や子育てに対する熱意は高く評価しており、夫婦仲も良いと評価している。一方で、両親の就業状況では共働きが多い状況にある。

学校生活や友達との関係については、満足度が高くなっている。

このグループは女子中学生が多いこともあり、まだ、結婚や出産に対しては理想を抱いている世代でもあり、このグループも今後、前述のグループに移ることも大いにありえるだろう。

（４）全般的に後ろ向きグループ

このグループは男子学生が多いのが特徴である。学校や地域で活動している人は少なく、また小さな子どもとふれあう機会も少ない。さらには、本気で友達とけんかすることがなかったり、何でも話せる同性の友達がいない人が多く、他人との人間関係がかなり希薄な人が多くなっている。

仕事や結婚などは大変、自由な時間がなくなるといったことをあげる人が多く、自分の時間をもっと多く持ちたいという人が多い。子育てにおいても同様であり、子育て中でも、自分のために使う時間を多く取りたいといった、やや自己中心的な人が多いと推測される。

両親に対しては、父親の評価が高く、母親の評価が低い傾向にある。夫婦仲もあまり良くない。

生活の満足度については、母親や学校生活、友達との関係に対する満足度が低い。

（５）仕事だけ積極的グループ

このグループは男子中学生が多いのが特徴である。一番時間をかけたいこととしては、「友人との時間」、「部活動やサークル」をあげる人が多い。しかし、悩み事については、「悩んでいることはない」あるいは、「無力感・やる気がでないこと」をあげる人が多く、悩みを相談している人もいない人が多くなっている。

友達付き合いについては、いつも友達といなくても寂しくない、といった比較的ドライな友達関係を希望している。

仕事に対しては、お金をかせぐことができる、仕事を通して、いろいろなことができるといった肯定的なイメージをもっている一方、結婚・子育てについては、「わからない」、「子育てをするのが大変そう」といった、ネガティブなイメージをもつ人が多いのが特徴である。

中高生においては、仕事や結婚・子育てに関しての意識形成が、まだ十分なされていないこともあり、特に身近な両親に対する評価や満足度、そして小さいころの家庭環境が大きく影響するものと考えられる。

また、当初は両親の就業状況は、意識形成に影響を及ぼすと仮定していたが、実際はあまり大きな影響を与えないことも分かった。一方で、地域とのかかわり方や他世代との交流などは、意識形成に影響を与えており、良好な友達関係や地域との交流の機会の提供していくことが求められている。

特に、「全般にほどほど」という第２グループ（約３割）が、「全てに前向き」な第１グループに行くのか、または「全てに後ろ向き」の第４グループ等に行くのかが、将来の少子化に大きな影響を与えると考えられることから、家庭や子育ての意義についての理解を深めるための教育・啓発や職業体験機会の提供などの取組を積極的・効果的に進めることが必要である。

さらには、第４グループや第５グループの人たちが、仕事・結婚・育児全般への積極性を育んでいくことができるよう、人との関わり合いに前向きになれるような家庭・学校・地域の環境づくりも重要であろう。

Ⅲ．今後の子育て支援策のあり方

昨年、厚生労働省から提示された「少子化対策プラスワン」は、これまでのような「子育てと仕事の両立」支援のための保育ニーズへの対応のみをうたったものではなく、「男性を含めた働き方の見直し」や「地域での子育て支援」、「子どもの社会性の向上や自立の促進」などを主な取組課題としている。

本調査は、こうした取組に対する具体的なニーズを把握し、施策推進上の課題を抽出することを目的として行った。

昨年度の「女性のライフコース選択の多様化に即した子育て支援のあり方」をテーマとした調査においても、女性が「子育て」と「仕事」に費やす時間や、「配偶者との時間」、「自分の時間」を生活の中でバランスよく持っていきたいと考えていることが明らかとなった。仕事との両立が困難であることだけが、子どもを産むことを躊躇させる大きな要因ではなく、自分の人生を充実させることを考えたときに、子育てが重荷になると考える世代が増えているとみられることから、働くためのサポートだけではなく、自分の時間を生きることのサポートが必要であることが明らかになった。

今年度の調査においては、女性だけではなく、男性も、仕事のみではなく、家族の時間や自分の時間を、もっと生活の中に配していきたいと考えていることがわかった。しかし、実態としては、職場の無理解や制度・慣例にしばられ、「子育てに十分時間をかけられない」、「休みが取りにくい、残業が多い」などの悩みを抱え、子育てや家族との時間、地域との関わりをもつことができないでいる。このため、仕事時間と生活時間のバランスが取れるような「働き方の見直し」が必要である。また、子育てに関わりたくとも、「子どもとの接し方に自信が持てない」という父親も少なくないことから、子育てに関する男性を対象とした情報提供や研修機会も必要であると考えられる。

一方、女性は、専業主婦と働く女性、それぞれに抱えている問題があることがわかった。専業主婦では、特に核家族の家庭で、「子どもとの接し方に自信が持てない」、「仕事や自分の時間を十分に取れない」ことを悩んでいる人が多く、親族や配偶者の支援を得にくく、地域の支援なども得られない女性が、ひとりで子育てを行うことの精神的な負担を感じており、自分の時間や社会との接点を求めている。

また、母親は、子どもと自分だけで家庭の中に閉じこめられるのではなく、日常的に子どもと安心して過ごせる居場所を求めている。そして、そうした場所での関わりの中で、自分の気持ちを理解してくれる支援者に気軽に相談することや、アドバイスを受けることを望んでいる。さらに、働いていなくとも、自分の病気の時や、冠婚葬祭や地域活動・学校の活動などに参加する時に、一時預かりサービス等を利用したいという要望もある。

働いている母親は、逆に、子どもを預けるばかりではなく、自らもっと子育てに向き合う時間を望んでいる。また、地域との関わり、母親同士のネットワークを望んでいる。働

いている女性についても、子育てと仕事、自分の時間のバランスが重要であることがみてとれる。

そして、働く母親も働いていない母親もともに、子どもを安心して遊ばせることのできる場所や機会を求めている。そうした場で、同じくらいの子どもの成長をたくさんの親同士がみつめることで、親の子どもを見る目も育ち、専門家に頼らずとも、親同士の助け合いで、過度の不安を解消することにつながるとみられる。

中高生の調査からは、次世代での新たな少子化の要因がみえてきた。仕事との両立の困難さから子どもをもつことを躊躇する世代から、自分の人生を充実させるために子どもが重荷であると考える世代へ、そして次の世代は、人との関わりや自分の人生を充実させることさえも負担であると考える人が増えるのではないかと危惧される。子育てに対する積極性は、仕事や結婚に対する積極性と相互に関係しており、それは取りも直さず、人との関わりに対する積極性に関係している。このことは、前節で整理したクラスター分析の結果にも顕著にあらわれている。人との関わりに臆病になり、負担感が強くなるほど、仕事・結婚・育児をためらう気持ちは強くなるとみられる。クラスターで分類されたような中高生の意識と行動の特性を踏まえ、家庭や子育ての意義についての理解を深めるための教育・啓発や職業体験機会の提供などの取組を積極的・効果的に進めることが必要である。

また、こうした人との関わりの積極性は、家庭での親子関係が大きく影響している。子どもが人との関わりを恐れず、人と向き合っていくためには、どのような親子関係が望まれるのか。今回調査対象とした中高生の親の世代が、すでに人との関わりに負担を感じているとみられる現代において、社会的にはどのような支援が可能であるのか、検討していく必要がある。実際に、アンケートからも、子どもをもつことにネガティブなイメージをもっている中高生は、現在、学校や地域の活動に参加していない人が多く、小さな子どもと触れ合う機会をもっていない人が多いことがわかっている。中高生等の青少年が、学校や家庭内の人間関係のみにしばられず、地域や社会との接点を持ち、小さな子どもなど他世代との交流や各種体験活動の機会を持てるような支援が必要であろう。また、中高生の将来の結婚に対する考え方は、「両親の仲の良さ」や「親に対する評価」などとも密接に関係していることから、親のあり方の重要性も再認識される必要があろう。

さらに、仕事・結婚・育児に対する積極性が相互に関係しているということは、現在の親の世代同様、こうした生活要素を、どれかに偏るのではなく、生活の中にバランスよく配していきたいという欲求には、変わらないものがあるということでもあろう。専業主婦や仕事一途の父親ではなく、育児と仕事に振りまわされるのでもなく、「仕事」と「家族」、さらには「自分」の時間をも大切にできるということが、次世代においても重要な課題であると考えられる。